

「ブルックリン」 ◆◆◆◆

2016（平成28）年7月9日鑑賞<TOHOシネマズ西宮OS>

監督：ジョン・クローリー

原作：コルム・トビーン『ブルックリン』（白水社刊）

エイリシュ・レイシー（ブルックリンに住むアイルランドからアメリカに移住する女性）／シアーシャ・ローナン

トニー・フィオレロ（ブルックリンに住むイタリア系移民の青年）／エモリー・コーエン

ジム・ファレル（アイルランドの良家の青年）／ドナル・グリーンソン

フラッド神父（同郷の神父）／ジム・ブロードベント

キーオ夫人（厳しい寮母）／ジュリー・ウォルターズ

ローズ・レイシー（エイリシュの姉）／フィオナ・グラスコット

ミス・ケリー（アイルランドの食品店の女経営者）／ブリッド・ブレナン

2015年・アイルランド、イギリス、カナダ合作映画・112分

配給／20世紀フォックス映画

<あの13歳のヒロインが、再び力強いヒロインに！>

『つぐない』（07年）はイギリス生まれの美女、キーラ・ナイトレイ主演というだけで、「こりゃ、必見！」と思って鑑賞したが、その物語は13歳の妹役を演じた1994年生まれ若手女優、シアーシャ・ローナンを主役とする、タイトル通りの素晴らしいもので、シアーシャ・ローナンはアカデミー賞助演女優賞にノミネートされた（『シネマルーム19』306頁参照）。その後の彼女の出演作としては、『ラブリー・ボーン』（09年）（『シネマルーム24』未掲載）、『ハンナ』（11年）（『シネマルーム27』未掲載）、『グランド・ブダペスト・ホテル』（14年）（『シネマルーム33』17頁参照）等を観ているが、『つぐない』から8年後の2015年、シアーシャ・ローナンが再び力強いヒロインとして登場！

『ブルックリン』はアメリカ、ニューヨークの町だが、1950年代にはアイルランドからの移民が押し寄せてきた町として有名。移民の中には、本作でシアーシャ・ローナンが演じたエイリシュ・レイシーのような真面目な若者もいたが、いわゆるアイリッシュ系ギャングになる若者がたくさんいたことも歴史的な事実。中学生の頃に観たミュージカル映画『ウエスト・サイド物語』（61年）では、歌と踊りのダイナミックさの他、人種のるつぼニューヨークのウエスト・サイドで生きる底辺の若者たちの抗争劇と恋愛劇に心を躍らせたし、『ギャング・オブ・ニューヨーク』（01年）（『シネマルーム2』49頁参照）や『ブラック・スキャンダル』（15年）（『シネマルーム37』59頁参照）に見るギャングの抗争劇は、映画のテーマとしてべらぼうに面白いものだった。それに対して本作は、不況のため、口うるさくて偏見だらけの店主ミス・ケリー（ブリッド・ブレナン）の食品店の仕事しか見つからなかったエイリシュが、会計士の姉ローズ（フィオナ・グラスコット）が与えてくれたアメリカで働くチャンスを活かし、新天地を求めてアメリカのブルックリンに渡り、そこで力強く生きていく物語。とは言っても、1950年代のアメリカで、移民の女の子ができることなんてたかが知れたもの。重いホームシックにかかって潰れかけようとする中、エイリシュはどんな風に生きていくの？

<ホームシックの克服には、男友達が一番！>

アイルランドからアメリカへの船旅は、海の荒れ方も時間も費用も、さらに入国審査も大変。本作冒頭は、狭くて臭い最下位の部屋で船酔いと闘いながら、ニューヨークへの旅を続けるエイリシュの姿が描かれる。これは考えてみれば、かつて1967年に松山の高校を卒業し、瀬戸内海を関西汽船の二等船室に乗って大阪に渡った時の私の姿と同じだ。その頃の私は、所持金も少ししかなく、荷物も少なかったが、新しい世界への希望だけは胸の中にいっぱいだった。もちろん、松山から大阪への船旅とアイルランドからアメリカへの船旅とはスケールが全然違うが、気持ちの持ち様は全く同じだ。

私の場合は、大学に入ってからすぐに下宿の相棒たちやクラスの友人たちにも慣れ、大阪弁にも慣れたから、ホームシックにかかることは全くなかったが、エイリシュのホームシックはかなり重篤らしい。エイリシュにとっては、厳しくて口うるさい寮母キーオ夫人（ジュリー・ウォルターズ）が仕切る、同郷の女性たちとの寮生活や、高級デパートでの売り子の仕事は大変なストレスだったらしい。そのため、ある日職場の上司から「ダメだし」を出されてしまったが、そんなエイリシュを救ってくれたのは、エイリシュの後見人的存在である、同郷のフラッド神父（ジム・ブロードベント）だ。これまでのケアが不足していたことを反省した彼は、ブルックリン大学の会計士コースの受講をすすめたところ、根が真面目なエイリシュにはこれが合っていたらしく、以降エイリシュは少しずつ元気に。

もっとも、私が4月に入学した大阪大学で5月頃急に元気になったのは、やっぱりガールフレンドとの出会いが大きかった。それと同じように、エイリシュもある日、アイルランドから移住してきた人たちのダンスパーティで知り合った、イタリア系の移民で配管工をしている若者トニー（エモリー・コーエン）から好意を持たれていることを知ると、たちまち元気に！

<私の故郷はどちら？私の男はどちら？>

第88回アカデミー賞の作品賞、脚色賞、主演女優賞の3部門にノミネートされ、ゴールデングローブ賞（ドラマ部門）の主演女優賞にもノミネートされた本作は、コルム・トビーン原作『ブルックリン』を大胆に脚色しているそうだが、起承転結が明確だから、きわめてわかりやすい。すなわち、夢を持ってアイルランドからアメリカに渡り（起）、トニーとの恋ですっかりアメリカの生活に慣れ自信を持ったエイリシュ（承）が、思いもかけない姉ローズの死亡の報を聞き、その葬儀のためアイルランドに里帰りする中で、新たな男性ジム・ファレル（ドナル・グリーンソン）と再会し、「私の故郷はどちら？私の男はどちら？」という悩みに立ち向かう（転）ことになる。

アメリカでエイリシュの帰りを待つトニーは配管工をしているイタリア系移民であるのに対し、新たにアイルランドでエイリシュに対して恋心を見せるジムは良家のお坊ちゃんだから、将来のことを考えると、トニーよりジムの方がベター？いやいや、既に2人だけの結婚式を挙げたうえ、エイリシュの帰りを一日千秋の思いで待っている誠実なトニーの方がベター？また、アメリカの水着やサングラスにも慣れ、何事も明るくて大きいアメリカの生活に慣れてしまったら、何事も暗くて狭いアイルランドの生活はもういや？それとも、やっぱり母親や幼馴染みの友達がいる故郷アイルランドの生活の方がいい？起承転結の「転」の部分で、エイリシュが悩む姿はたしかに悩ましい。

『つぐない』で13歳の女の子が出した結論は直感的で早かったが、その分後悔も大きくなってしまったが、本作でシアーシャ・ローナンが演じるエイリシュが見せる「私の故郷はどちら？私の男はどちら？」と大いに悩む姿に注目！

<決めるのは私！その変身ぶりとか強さにビックリ！>

田舎から都会に出てきた十代後半の女の子が、当初のイモ姉ちゃんから少しずつきれいになり、自信に満ちあふれた女性に化けていくのは、よくあること。私も大学時代に同世代の男の目で、そんな経験を何度もした。また、弁護士事務所を経営し、女性事務員を雇うようになってからは、経営者の目でそんな経験を何度もしてきた。しかして本作では、シアーシャ・ローナン演じるエイリシュが当初の「イモ姉ちゃん」から、次第に洗練され、自信に満ちあふれたレディに変身していくサマがまぶしく見えてくる。

もっとも、私の目にはシアーシャ・ローナンがそれほどビックリするほど美人でないのが少し残念。オードリー・ヘプバーン主演の『マイ・フェア・レディ』（64年）では、口汚い言葉しか喋れない田舎の花売り娘が、美しい英語を操る洗練されたレディに変身していくサマが面白く描かれていた。また、黒木瞳の若さと美しさが際立っていた『化身』（86年）でも、まさにタイトル通りの化身ぶりが見物だった。それと同じように本作でも、エイリシュがブルックリンに渡りそこで生活していく中で、大きく変身、成長し、魅力的な女性になったうえで、故郷アイルランドに一時帰国する物語が描かれる。そして、その時に再会したジムと恋仲に落ちるのだが、そんな「二股がけ」の中でエイリシュが下す選択は？

ストーリーの展開を見ていると、ひょっとしてこのままずるずると故郷での居残りを決めてしまうのか？という雰囲気もあったが、それをぶち壊したのは、昔から口うるさかった、食品店の女経営者ミス・ケリーのいらざるおせっかい。そうだ、この町はこんな狭い、陰険な世界だったのだ。それに比べて、アメリカの広さは？開放性は？明るさは？それがハッキリ見えた後のエイリシュの決断は早い。また、その決断を下すには、もはや母親との相談も、ジムとの相談も無用。決めるのは私！そこまで自己を確立させたエイリシュの変身ぶりとか強さにビックリ！

しかして、2度目のアイルランドからアメリカへの船旅は、かつての自分と同じような不安を胸いっぱい抱えて船に乗り込んだ女の子を力強くアドバイスし、リードする立場に・・・